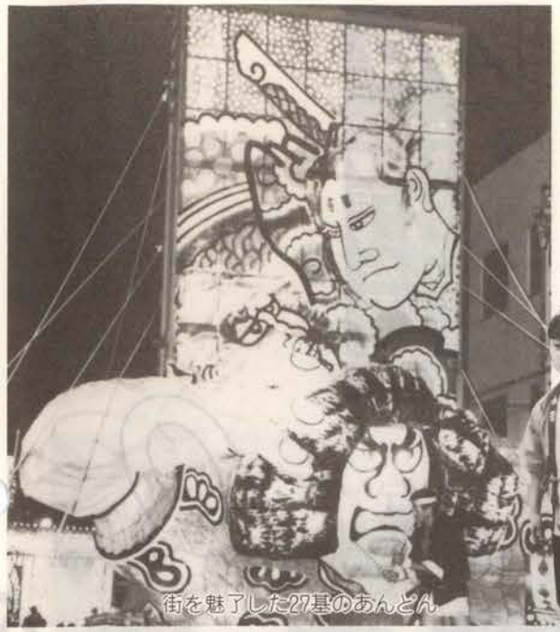

街を魅了した27基のあんどん

多彩なイベント

夏祭り

幕閉じる

力・力・力自慢が集った綱引き大会

波・風をいっぱいに受けてのボートレース

味覚いっぱい・腹いっぱい

さあーっ、相手の武将を落せ！

10秒をきった川渡り

塩見海水場附近

大（カクダイ）佐賀家番屋

福士広志
海のふるさと館学芸係長

留萌から増毛に向い、海水浴客でにぎわった浜中から大きくカーブし、礼受漁港を過ぎると左側に大きな因（カクダイ）という屋号の書かれた青いトタン張りの倉庫が目に入る。その周りには番屋、岡上には朱塗りの鳥居と小さな社が見える。上の木造の倉には、船の舳先がちょこんと顔をだし、JR増毛線の向う側にも倉が見える。建物群の中央には広場があり、国道の下の海岸近くには鰊を入れた廊下が風雪に耐えて建っている。そのそばの草わらをかきわけてみると壊れかけた竈の跡が残っている。

この風景の中には昭和三十二年までの西海岸の鰊漁でにぎわった漁場の風情がそのままに残っている。目をつぶれば忙しく働く漁夫たちの姿が二重写しになる。

こんな原風景を持つニシン場は今やあれだけニシン漁で栄えた北海道にも残ってはいない。ここを因（カクダイ）佐賀家漁場というこの佐賀家漁場の特徴はニシン漁、それも純粋の留萌の礼受で使われていたニシン漁具、ニシン加工の用具が残されていることである。昭和三十二年まで礼受ではニシン漁があった。しかし、翌年もニシンがとれると考えて準備をして待っていた。しかし、ニシンは来なかったのである。そして、準備していた用具を仕舞い込んで再び使用されることはなかった。

佐賀家は青森県下北郡風間浦村下風呂に現在も続いている。佐賀平之丞が弘化元年（一八四四）に初めて留萌の礼受（現在地）にニシン漁場を開き、昭和三十三年（一九五七）にニシン漁が終焉するまで百十三年間三代にわたり、礼受でニシン漁を続けた家柄である。留萌のニシン漁の草分け的な家である。留萌のニシン漁を語るときには佐賀家をのぞいて語ることはできない。

現在、佐賀番屋所蔵の貴重なニシン漁の漁具を文化財として残すために今年から三ヶ年をかけて調査を行っている。佐賀家のニシン漁の全貌が明らかになる日もそう遠くはないであろう。ニシン漁で栄えた留萌の姿を後世の人たちに末永劫伝えていくことも留萌に住む我々の義務である。

調査に快くご協力いただいている佐賀平一郎氏および関係者の方に深く感謝する次第である。